

肢体不自由児の成長を支える書写指導

—ひらがなの習得に関する実践報告—

河野 文子

I. 目的

肢体不自由児の障害の特性は、脳性まひ、二分脊椎等の障害原因によって特徴があるとされてきた。たしかにその障害原因によって、特性の傾向があることが、多くの実践報告で示されている。また、それらの実践の中では、肢体不自由児の障害種別に着目して研究されているものも多い。しかし、我われが指導する児童は、決して障害原因によってその障害の特性がはっきり分けられるほど、差異が明確である場合ばかりではない。すなわち障害原因によって共通の傾向がある場合もあるが、障害原因が異なっても共通の傾向がある場合もある。

本研究では、肢体不自由児への書写指導を通して、障害原因や障害種別と児童の学習の経過との関連を明らかにしながら、それらの傾向に合わせた手立てのあり方を探ることを目的とする。

II. 方法

1. 対象児童の実態

以下に対象児童の実態を記す。学年は小学部第1学年、準ずる教育課程で学ぶ肢体不自由児5名が対象である。

(1)A児について

①身体面

○日常生活における移動手段は、独歩。保護帽及び補装靴を着用。尖足気味で歩行し長時間の歩行は疲れやすいので車椅子を使用。急いで小走りになると転ぶことがある。授業場面では、カットテーブルの学習用机と児童椅子を使用する。

○書字、食事、衣服の着脱等の上肢操作は、ほぼ自立している。手や腕の回外運動、指先で大きさの小さいものや厚みの薄いものを掴む動作等にやや困難さがある。また、姿勢の崩れに対する気づきが少ない。

②A児の国語科の授業における学習の状況

○文字のとめやはね等の細部に注目しにくいいため、字形が崩れることが多い。

○文字を書いた後、書き直すことが多い。

○教科書の文章は、短い文であれば正しく音読できることが多い。

○マスの中にバランスよい大きさにそろえて文字を

書き入れることが難しい。

○物語の読み聞かせでは、途中で集中できなくなることがある。話の流れを自分なりに捉えて、感じたことを簡単な言葉を使って発表することができる。

(2)B児について

①身体面

○日常生活における移動手段は、褥瘡予防の座面のついた車椅子を使用。授業場面では、その車椅子と、カットテーブルの学習机を使用。床面へ降りるときは、教員の介助が必要。

○書字、食事、衣服の着脱等の上肢操作は、ほぼ自立している。また、姿勢の崩れに対する気づきが少ない。

②B児の国語科の授業における学習の状況

○文字の大まかな形は理解できるが、細部の大きさや形を誤って書くことがあり、字形が崩れることが多い。

○文字を書くのは早い書き忘れることがある。

○大きな声ではっきりと正しく音読できることが多い。

○文字をマスの中にバランスよい大きさに書き入れることが難しい。

○物語の読み聞かせでは、集中し注目して聞き、感じたことを簡単な言葉を使って発表することができる。

(3)C児について

①身体面

○日常生活における移動手段は、車椅子を使用。授業場面では、座位保持椅子を使用し、車椅子への移乗については教員の見守り及び介助が必要。

○書字、食事、衣服の着脱等の上肢操作は、自力でできるところもあるが、教員の介助が必要。手や腕の回外運動、指先で大きさの小さいものや厚みの薄いものを掴む動作等に困難さがある。また、姿勢の崩れに対する気づきが少ない。

②C児の国語科の授業における学習の状況

○文字の大まかな形を捉えることが苦手であるため、字形が崩れることが多い。

○文字を書くときに時間が多くかかる。

○大きな声ではっきりと正しく音読できることが多い。

- マスの中にバランスよい大きさにそろえて文字を書き入れることが難しい。
- 物語の読み聞かせでは、集中し注目して聞くことができる。また、感じたことを自分の言葉で発表することができる。

(4)D児について

①身体面

- 日常生活における移動手段は、車椅子を使用。授業場面では、車椅子とカットテーブルの学習機を使用する。床面へ降りるときは教員の介助が必要。
- 書字は、筆記具を持つことは自立している。食事は、ほぼ自立しているが、集めたりすくったりするのに教員の介助が必要な場合がある。衣服の着脱は、教員の介助が必要。また、姿勢の崩れに対する気づきが少ない。

②D児の国語科の授業における学習の状況

- 文字の大まかな形を捉えることが苦手であるため字形が崩れることが多い。
- 文字を書くときに時間が多くかかる。
- 音読の声が小さいことが多い。
- マスの中にバランスよい大きさにそろえて文字を書き入れることが難しい。
- 物語の読み聞かせでは、友達の意見を聞いて感じたことを簡単な言葉を使って発表することができる。ただし、難しい場面も多い。

(5)E児について

①身体面

- 日常生活における移動手段は、車椅子を使用。授業場面では、車椅子とカットテーブルの学習機を使用する。床面へ降りるときは教員の介助が必要。
- 書字、食事、衣服の着脱等の上肢操作は、自力でできるところもあるが、部分的に教員の介助が必要。手や腕の回外運動、細かなものを掴む動作等に困難さがある場合がある。

②E児の国語科の授業における学習の状況

- 文字の大まかな形を捉えることが難しいことがある。
- 文字を書くときに時間が多くかかる。
- 音読する声が小さいことがある。
- マスの中にバランスよい大きさにそろえて文字を書き入れることができないことが多い。
- 物語の読み聞かせでは、集中し注目して聞くことができる。また、感じたことを簡単な言葉を使って発表することができる。

がな」の指導（硬筆による書写指導のワークシートを含む）、（4）「ひらがなノート」指導、（5）毛筆による書写指導である。以下、それぞれの指導の内容である。

(1)日記指導

一日の生活の中で、「たのしかったこと」を選び、その理由や内容を書くという課題で、毎日書き、国語の授業の冒頭に発表する。記述の誤りや意味の通らない部分については、その場で直すよう指導する。ただし、内容については、原則としてそのまま児童の気持ちを生かすようにした。

(2)「せいかつしらべ」の指導

一日の生活の中で、起きた時間、朝食、昼食（給食）、夕食、排泄、寝た時間を記入するという課題で、毎日書き、国語の授業の冒頭に発表する。食事のメニューは、原則ひらがなで記入する。記述の誤りや未記入の部分については、その場で直し記入する。生活の内容自体については、児童自身が気づくことを優先し、教員はその場で触れないようにした。

(3)「ひらがな」の指導（硬筆による書写指導のワークシートを含む）

画数や交差の部分の少ない順に、原則一日一文字～二文字を取り上げ、画数や細かな部分（トメ、ハネ、ハラ、イレ、ムスビ）に注目しながら、文字の形を学習した後、その文字をつかった単語を数語書く。ワークシートに硬筆で書くことも行った。

(4)「ひらがなノート」の指導

ひらがなを一行8マスのノートに2行書く。一日2行～4行書き、書き間違いを指導した。

(5)毛筆による書写指導

ひらがな二文字での季節の単語を縦書きにして半紙に毛筆で書く課題で、月に2～3回行った。同じ課題で2回書き一枚目を書き終えた後、児童自身が評価を行った。続いて二枚目を書き終えた後、児童自身が一枚目と二枚目どちらがうまく書けたか（気に入ったか）、その理由を発表した。その後、クラスの他の児童は、その児童の作品のどちらが気に入ったかを発表した。

2. 対象児童への主な書写指導の内容

対象児童へ主に5つの関連する指導を行った。（1）日記指導、（2）「せいかつしらべ」の指導、（3）「ひら

Ⅲ. 結果

1. 指導の結果

(1) 日記指導

一日の生活の中で、「きょう、わたしは、ずこうがたのしかったです。きれいなはなをたくさんかいたからです」というような二つの文での日記を書くことから始まり、「たのしかったこと」がいくつかあったときは、文を増やして書くようになった。「たのしかった」とのせつめいとして、「いつ、どこに、だれと」行ったのか、また「いつ、どこで、だれと」行なったのか、という内容の詳しい説明の部分を増やして書くことも増えていった。毎日「たのしかった」ことを日記に書くという課題は、毎日の生活を振り返って「たのしかった」ことを見つけることである。しかし、毎日日記を書くという課題があるということで、生活しながら日記の題材を見つけたり、日記の題材に気付いたりすることに繋がった。また、友達の日記の発表を聞き感動したり共感したりして、自分の生活を見直すことにもなった。毎日40字ほどの文字をマスの中に書くことで書くことへの抵抗がなく文字を書くこと自体に慣れることができた。(写真1参照)

さらに、楽しいことや楽しいことの理由が複数あった場合等の表現を発展させるために、「も」を使用した文で表現することを取り入れたところ、単に楽しかったことの羅列ではなく、各文中の言葉の関連を意識して書くことが増えた。

(2)「せいかつしらべ」の指導

家庭での協力を得て、児童全員がほぼ毎日この課題に取り組むことができた。この課題によって、日記の指導と同様に文字を日常的に書くということを継続することができた。時間の記入では、時計の長針と短針を色鉛筆で書き入れるようにして、算教科で時計の学習を行うことと並行して行ったところ成果があった。食事のメニューについては、当初食材の材料の記入だけであったものが、献立の詳しい名称を記入できるようになった。献立によっては、字数が多いこともあり、また、たまには書き忘れることもあったが、全員積極的に取り組んでいた。生活の内容自体について、児童自身が生活の内容を改善するための言動を自主的に行うようになっていた。語彙を増やし、言葉のイメージを拡げるために有効であるとともに、その言葉を使つての言語活動も活発となった。

(3)「ひらがな」の指導(硬筆による書写指導のワークシートを含む)

ひらがなの学習では、五十音順の学習が主流であったが、近年美しく書くための学習法²⁾やなぞらず効率的におぼえるための方法³⁾などが紹介されている。文字の形を捉えることや、細かな部分を正確に書くことが難しい

児童の実態に合わせて、体験的な言語経験が少なくても、文字を捉え易くなるような工夫するとともに、画数や交差の部分の少ない順に、原則一日一文字～二文字を取り上げ、画数や、細かな部分(トメ、ハネ、ハライ、オレ、ムスビ)に注目しながら、文字の形を学習できるように指導した。

ワークシートに硬筆で書く場合の、筆記具の持ち方や姿勢についても個々の児童へ個別に指導した。筆記具の持ち方については、親指と人差し指と人差し指を使って持てるように指導し難しい児童では、軸を太くして指の位置に各指を当てるようにしたホルダーを使用して書かせたところ、飛躍的に安定して書字できるようになった。また、字の形を把握することが難しい児童では、一画ずつ順に、異なる色の色鉛筆で書き、それをなぞって、次の一面をまた異なる色の色鉛筆で書き、それをなぞるという指導をしたところ、次第に手立てがなくても自分で書けるようになった。(写真2参照)

(4)「ひらがなノート」の指導

児童の実態に応じて、8マスを2行～4行としたが、一番上に書かれた文字をなぞって下に7マス分文字を書かせた。文字の形を理解することが難しい場合には、なぞり書きで7文字分書かせたところ次第になぞり書きでなくても正しい字形でかけるようになった。

(5)毛筆による書写指導

各月毎に、異なった二文字で構成された季節感のある単語であり且つ、児童の生活に身近なことを課題として取り上げての時間で、一同が楽しく活動できた。

毛筆での書写指導は、現行での学習指導要領¹⁾では第3学年時からであるが、毛筆での書字は、筆の毛先の弾力により筆圧のフィードバックが容易であり、また、筆圧が弱く硬筆ではしっかりと文字を書くのが難しい場合でも、墨を筆に含ませて書く毛筆では弱い筆圧でもしっかりと書いた太い文字を書くことができた。この結果文字を書くことに苦手意識を持っていた児童の多くは、自身の書いた文字に驚くとともに自信を持ち、毛筆による書写指導の授業を楽しみにするようになった。さらに、同じ課題で2回書く場合の、一枚目を書き終えた後の自己評価では、どの児童も言葉に出したり周囲に伝えたりしなくても、続いての二枚目で一枚目の欠点を直し、最後の自己評価では多くの場合に、二枚目のその部分をうまく書けた(気に入った)と評価した。クラスの他の児童も、ほとんどの場合共感していた。(写真3参照)

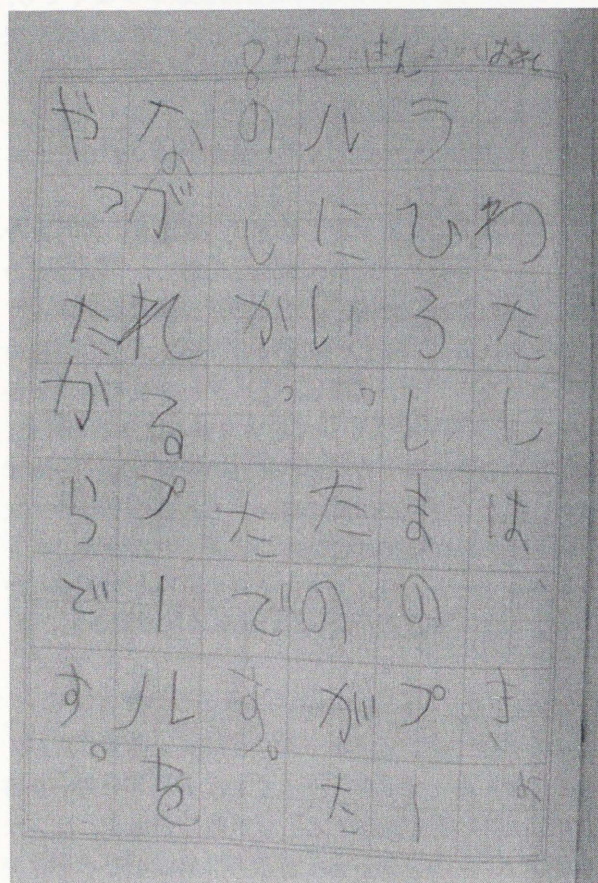


写真1 日記指導

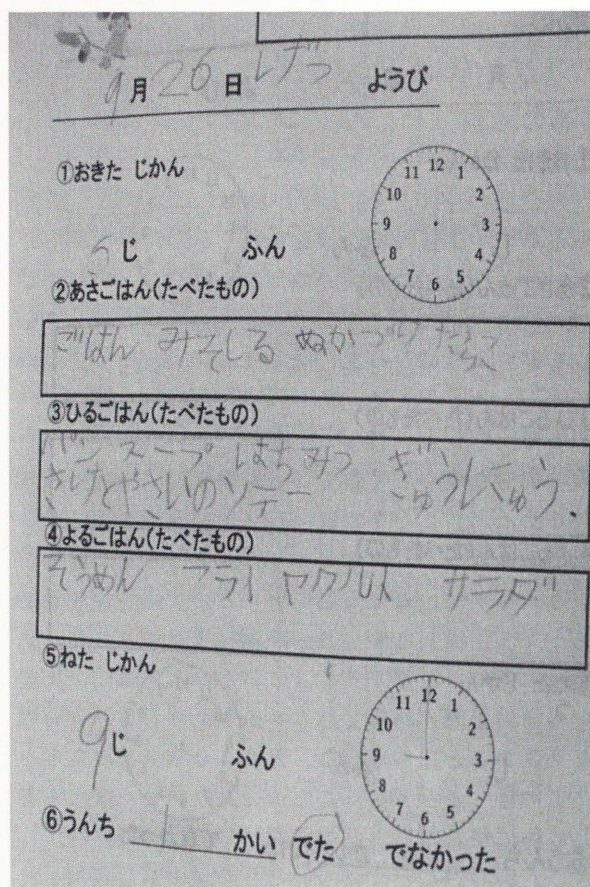


写真2 生活調べ



写真3 毛筆による書写指導

2. 対象児童の変化

(1)A児について

①身体面

- 日常生活における移動手段は、保護帽及び補装靴を着用して独歩。授業場面では、カットテーブルの学習用机とすべり止めシートを座面に貼った児童椅子を使用し、書字の際は体と椅子の間の拳一つ分を自分で意識して椅子を引くことができる。
- 書字、食事、衣服の着脱等の上肢操作は、ほぼ自立している。書字の際の姿勢の崩れに対しては自分で気づくことができる。

②A児の国語科の授業における学習の状況

- どの部分がうまく書けないので字形が崩れているのかを自分で気づくことが多い。
- 文字を全部書く前に、自分で消して書き直すことが多い。
- 教科書の文章は、ほぼ正しく音読できることが多い。
- マスの中にバランスよい大きさにそろえて書き入れられることが増えた。
- 物語の読み聞かせでは、ほぼ集中できる。友達の意見も参考にして自分で感じたことを簡単な言葉を使って発表することができる。

(2)B児について

①身体面

- 日常生活での移動は、褥瘡予防の座面のついた車椅子の座面の傾斜を改善して使用。授業場面では、座位保持椅子とカットテーブルの学習机を使用した。が、褥瘡の悪化により、移動時に使用する車椅子とカットテーブルを使用することにもどした。床面へ降りるときは、教員の介助が必要であるが、自分から介助を依頼することができるようになった。
- 書字、食事、衣服の着脱等の上肢操作は、ほぼしている。姿勢の崩れについては、自分から正しく直してもらおうことを依頼したり、腰痛を訴えて身体を伸ばしてもらおうよう依頼したりすることができるようになった。

②B児の国語科の授業における学習の状況

- 文字の細部の大きさや形についても注意深く書くようになり、字形が崩れることが減った。
- 文字を書き忘れることが減った。
- 暗唱して大きな声ではっきりと正しく音読できる。
- 文字をマスの中にバランスよい大きさにそろえて書き入れることが多い。
- 物語の読み聞かせでは、集中して注目して聞き、感じたことを自分なりの言葉を使って積極的に発表することができる。

(3)C児について

①身体面

- 日常生活における移動手段は、車椅子を使用。授業場面では、座位保持椅子を使用し、移乗については教員の支えがあれば、立位して踏ん張り乗り換えることができる。床部へ降りるときは教員の見守りがあれば自力で動き降りることができる。
- 書字、食事、衣服の着脱等の上肢操作は、教員の介助が必要ながらもできるところは自力で行おうとする。大ききの小さいものや厚みの薄いものを掴む動作等にはやや困難さがあるが、ホルダーを使用することに慣れてきた。姿勢の崩れに対して気づき、直そうとすることが増えた。

②C児の国語科の授業における学習の状況

- 文字の大まかな形を捉えて書けることが増えた。不完全であっても大まかな字形がとれている。
- 文字を書くときに時間がかかるが最後まで粘り強く取り組む。
- 暗唱し大きな声ではっきりと正しく音読できる。
- マスを意識して中にバランスよい大きさにそろえて文字を書き入れようとする。
- 物語の読み聞かせでは、積極的に集中して注目して聞くことができる。また、友達の意見を参考にしながらも感じたことを自分なりの言葉を使って発表することができる。

(4)D児について

①身体面

- 日常生活における移動手段は、座面の傾斜とバランスを改善した車椅子を使用。授業場面では、車椅子とカットテーブルの学習机を使用する。床面へ降りるときは教員に介助を依頼できる。
- 書字は、傾斜台を使用し姿勢に気を付けながら筆記具を正しく持って書くことができる。食事は、ほぼ自立しているが、集めたりすくったりすることに教員の声かけが必要な場合がある。衣服の着脱は、教員に自分から介助を依頼できる。また、周囲の友達の様子を見て姿勢の崩れに気づくこともできる。

②国語科の授業における学習の状況

- 文字の大まかな形をほぼ捉えることができる。字形の崩れを直そうとする。
- 文字を書くのが次第に早くなってきた。
- 音読の声がはっきりと大きくなってきた。
- マスの中にバランスよい大きさにそろえて書き入れることができる文字が増えた。
- 物語の読み聞かせでは、友達の意見を聞いて自分で感じたことを簡単な言葉を使って発表することができる。

(5)E児について

①身体面

○日常生活における移動手段は、車椅子を使用。車椅子をこぐのが速くなってきた。授業場面では、車椅子とカットテーブルの学習機を使用する。床面へ降りるときは自分から教員の介助を依頼でき支えられながら降りることができる。

○書字、食事、衣服の着脱等の上肢操作は、教員の介助も必要であるがほとんど自力で行える。

②E児の国語科の授業における学習の状況

○ほぼ文字の大まかな形を捉えることができる。

○文字を書くのが速くなってきた。

○しっかりと大きな声で音読することができるようになった。

○マスの中にバランスよい大きさにそろえて文字を書き入れることがほぼできる。

○物語の読み聞かせでは、集中し注目して聞くことができる。また、友達の感想を参考にしながら、自分で感じたことを簡単な言葉を使って発表することができる。

書字することが苦痛であるような強引な指導では、決して文字学習の促進効果は期待できない。児童が進んで楽しみながら積極的に学習できることが望ましい。そのために、毎日の学習で友達とともに共感し合いながら継続的にできるような課題を選定していくことが重要である。

自分にはできない、と諦めていたことが、自分にはできると気づけることが、ともすれば生活経験が限定的となりがちな肢体不自由児にとって非常に重要である。そのために、特に小学部低学年時では、ICT や代替手段によらなくても、「できる」という経験を多くできるよう指導の工夫をしていくことが必要である。

V. 参考文献

- 1) 文部科学省(2008). 学習指導要領
- 2) 本田弘之(2014). すぐ書ける! きれいに書ける! ひらがな・カタカナ練習ノート, アルク
- 3) 林聖(2012). なぞらずうまくなる子どものひらがな練習帳, 実務教育出版
- 4) 関島章江(2013). ICT 教育にもの申す!, インプレスR&D

IV. 考察

このように対象児童は、3ヶ月でひらがなのすべてを覚えてほぼ正しく書くことができるようになった。また、授業時以外の場面でも身体面等で自分の各機能について意識して、行動することが増えてきた。これらは、児童への個別の指導や手立てが奏功したということもできる。しかし、このように児童の意識を変化させた一番の理由は、児童が学校生活の中で自信を持ち積極的に行動するようになったことであると考えられる。

自分でできることが増え、努力することで得られる結果が明白になっていくことが、自己肯定感を高め意欲に繋がっていく。それは、書写学習における指導やそれによる変化でも明らかとなった。

肢体不自由児では、文字を書くための上肢機能に加えて、文字の形を捉えるための認知機能にも困難のある場合がある。健常児でもこのような困難のある場合も見られるが、毎日の学校生活で文字を書いているうちにこのような困難を次第に克服改善することができる場合が多い。しかし、これらの困難のある肢体不自由児の多くは、文字の学習の機会が少ない上に、文字を書くこと自体にも多くの時間を要するため、文字を習得したり、書字を行ったりすることに費やされる時間やエネルギーが十分でない場合が多い。

ICT の活用³⁾ などにより、文字を手書きで書くことは必ずしも必要でないという場面も増えてきたが、とくに文字の形を理解し覚えていく上では、書字できることがそれを促進していくというのは明らかである。ただし、